

## ダイズ茎疫病（病原菌：*Phytophthora sojae*）

### ○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による土壌伝染性の病害で、発芽間もない幼苗期から成熟期まで発生する。感染は出芽前から始まり、不発芽の原因となる。幼苗期には主に茎の地際部に水浸状の条斑または楕円形の病斑、後に茶褐色～暗褐色の大型病斑が形成され、立枯症に発展する。被害としてはこの時期のものが大きい。生育の進んだダイズでは根や茎の地際部が侵され、根腐症状を呈する。

本病原菌はダイズだけに強い病原性をもつ。一次伝染源は前年の被害株中に形成された卵孢子である。生育期には病斑上に新しく形成された遊走子のうから遊走子が多数形成され、二次伝染が繰り返される。

発病適温は 15～30℃で、ほ場の冠水や滞水により発生が多くなる。

### ○ 防除方法

#### （ア）耕種・物理的防除

- ・高畦栽培、排水溝の設置等の排水対策を実施する。
- ・連作を避ける。
- ・発病株は抜き取り、ほ場外で適正に処分する。
- ・土壌 pH が低いと発生しやすいので、石灰で pH6.5 程度に酸度を矯正する。

#### （イ）薬剤防除

- ・冠水しやすいほ場や過去に多発生したことがあるほ場では、ランマン剤、クルーザー剤の種子塗沫処理を行う。
- ・出芽後集中豪雨等で冠水した場合は、直後にリドミルゴールド MZ 剤、ライメイ剤、ランマン剤、プロポーズ剤等を散布する。
- ・薬剤散布にあたっては、作物の株元に薬液がよく付着するよう丁寧に散布する。



出芽直後の症状



生育後期の症状



水中に泳ぎ出す茎疫病菌の遊走子

（写真はいずれも農研機構中央農業総合研究センター 大豆生産安定研究チーム 加藤雅康氏提供）